

氏 名	なか はた まさ し 中 畑 正 志
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 487 号
学位授与の日付	平 成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	魂・心・世界

——心的基礎概念の歴史的考察——

論文調査委員	(主 査) 教 授 内 山 勝 利	教 授 川 添 信 介	教 授 伊 藤 邦 武
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、心にかかわる基礎的な諸概念が西洋において成立し、受容され変容された歴史を具体的にたどるとともに、そうした概念をめぐる思考が依拠する理論的諸前提を明らかにし、それとは別の仕方での理解の可能性を展望することを目指したものである。

この論文で検討されるのは「対象」「感情」「想像」「志向性」という四つの概念であるが、これらの概念は、現在では心のはたらきを理解するうえで不可欠の役割を担っている。論者は序章において、このような基礎概念の歴史をたどり直すことの意義として次の点を指摘する。すなわち第一に、現在では自明で不可欠に見える概念であっても、その概念が必要とされ受容された文脈を解明することは概念の不可避性と自明性を再考する手がかりになること、第二に、基礎概念の変容はより大きな思考のシステムと連動しているので、概念の変遷の歴史の検討によって、心をめぐる概念の枠組や基本的描像の由来と特質を明らかにすることが期待できることである。

序章ではさらに、論文の考察結果全体を俯瞰し、検討される諸概念の歴史において共通して問題となる心の描像を確認している。その描像とは、心の活動を「世界から独立の内的で能動的なはたらき」として理解するものである。この描像は、われわれの認知活動を「外から受動的に与えられるもの」に対して「心が内から能動的にはたらきかける」という構図のもとに捉える。他方で論者は、心について以上の見方とは異なる理解が存在し、それが現在でも有効な理論的選択肢の一つであることを示唆している。この別の考え方とは、要約すれば、心的はたらきを「本質的に世界にかかわり世界のあり方を受容する活動」して描き出すものである。論者はその原型を、アリストテレスの魂論の内に求める。アリストテレスにとって、魂とは生きることの原理であり、いわゆる心のはたらきも栄養摂取などと並んで〈生きる〉ということの発現形態の一つであった。アリストテレスが魂の受容の性格が重視するのも、環境に実在する情報を受容しそれに適応することが生存のために不可欠だからである。論者によれば、アリストテレスは生存するうえでの心的機能の役割に注目することによって、外的世界との関わりを本質とする外在主義的な心の理解を示唆したのである。

以上のような見通しのもとで、諸概念の歴史的変遷が具体的・実証的に跡づけられる。まず第1章において、対象(object, Objekt, objet)の概念の系譜が検討される。objectとsubjectという対概念については、デカルトからカントに至る近代哲学の形成過程において、subjectが自存する存在者から主観へ、objectが心のはたらきに相関的なものから客観へと、文字通り「主客転倒」したというのが思想史の常識となっている。しかし論者はobjectの語源となったラテン語のobiectumという名詞およびこの名詞の成立に先行するobiectusという完了受動分詞の用法を再点検し、この通説的理解が大きく修正されねばならないことを論証している。すなわち、obiectumという名詞はすでに13世紀中葉には心的はたらきの「対象」の意味で使用されていた。その背景には12世紀末から13世紀初頭において、この語がアリストテレスの魂論におけるantikeimenon(相関対象)という言葉に相当するラテン語として使用されるようになったという事情がある。しかし、antikeimenonとobiectumとの間には重要な相違が存在する。アリストテレスがその語によって意味したのは、心的活動とその対象とが相互規定的であり、対象との関係がそれぞれの心的活動を構成するという考え方だった。他方、obiectumは

「心へと投げ与えられたもの」という動的意味を潜在的に保持し、心はそれに対して能動的にはたらくというベクトルの交差的な認識の描像の一端を担っていた。論者は、このような *objectum* の含意の背景に、ラテン教父やストア派による完了分詞 *objectus* の用法とそれに伴う魂（心）についての理解が存在することを、ボエティウスやアウグスティヌス、キケロの著作の具体的な分析を通じて明らかにし、そこでの *objectus* が、表象や形象を心に向かって与えるという意味で使用されていることを確認している。

論者によれば、13世紀初頭に登場した *objectum* という名詞は、アリストテレスの *antikeimenon* に相当するものとして使用されることによって、もはや「表象」などの認識論的媒介項に言及するものではないが、上記の認識論的図式は放棄されず、その後の認識論に引き継がれている。しかし、アリストテレスの魂論は、それとは異なり、心の活動そのものが＜対象＞という実在する世界の一部を巻き込む形で成立しているという、別の見方を示唆するものであった。

第2章は、西洋古代における感情概念の成立過程を追跡している。論者は現代の哲学的感情論が、感情のもつ志向性や認知性および継続性と一定の合理的局面を重視しつつその生理学的基礎と社会的相対性の関係を争点としていることを概観した上で、そのような感情の理解と問題は、西洋古代のストア派やアリストテレスの「パトス」という概念においてすでに先取りされていることを指摘する。他方でプラトン以前の文献では、喜びや悲しみなど一定の範囲の心的事象を包摂する高階の概念としての＜感情＞の存在は、明確な形では確認できない。したがって、この意味での感情の概念の形成の上で、プラトンの著作が重要な里程であったことが予想される。

事実アリストテレスの感情の分析に影響を与えたのは、プラトンの『ピレボス』における観劇する観客の心理をモデルとした分析である。さらにその議論の背景には、『国家』第十巻での、ホメロスの作品や悲喜劇が魂に与える影響についてのプラトンの考察がある。プラトンは、詩人たちの語りの様式が、人間の多種多様な心理と行動をある視点から一定のかたちへと収斂するものであると理解した。その語りの様式は、ほぼ＜感情＞というカテゴリーに属する心的事象の性質に依存するものであり、プラトンはそれを魂の非理知的部分に属するはたらきとした。彼は詩人たちの語りの様式が焦点とする心的事象をそれとして反省的に特定することによって、感情という概念的集約の成立に貢献したのである。論者は、感情概念の成立へといたる以上のような系譜が、現在議論の盛んな感情の自然性（生理学的基礎）と社会性（文化的制約）という問題を考える上でも重要であると指摘する。

第3章は、想像や幻想などの概念の源であるファンタシアーの概念の歴史を考察している。幻想（fantasy）や想像（imagination）という言葉は、古代ギリシアにおいて＜感覚的現われ＞などを意味した「ファンタシアー」（phantasia）に由来する。つまりこの言葉の表す心的活動は、経験世界に密着した認知から経験から最大限の距離をとるはたらきへと大きく変貌したのである。この変貌は、＜受動的・模倣的・依存的＞な心的能力から＜能動的・創造的・自律的＞なそれへの転換として描き出されることが多い。論者は、アリストテレスのファンタシアー論が、その後の解釈と受容の歴史を通じて以上のようなファンタシアーの変遷を促した起点となったが、しかし本来は以上のストーリーに抗うような、ファンタシアーについての別の思考の可能性を胚胎していたと主張する。

論者によれば、アリストテレスのファンタシアーをめぐる諸解釈のほとんどは、古代以来現代に至るまで、ファンタシアーが＜感覚知覚の結果として、感覚知覚とは別個に成立する何らかの認知＞であるという見方を基本とするが、このような想定はアリストテレスに帰されるべきではない。ファンタシアーは「現実活動態にある感覚によって生起する動」と規定されるが、この動は感覚知覚活動全体の一部を構成すると理解するほうが説得的で整合的である。つまりファンタシアーは、感覚知覚の結果として別個の認知を生み出すのではなく、感覚知覚の一つの局面である「現われ」「～と現われている」という認知にかかわる。またアリストテレスは、像（エイドーロン）と絵画（ゾーオン）との概念的区別を利用して、ファンタシアーによって成立するファンタスマ（現われ）の内容が何かの似像として成立する必要はないと論じているが、これはファンタスマが感覚の写しや像であるという伝統的解釈を斥けるものである。さらに論者は、アリストテレスのファンタシアーが知覚の内容を構成するものであると同時に記憶と結びついていることを重要視する。ファンタシアーと記憶との関係は、知覚的現われが現に知覚している当の対象だけでなく現在および過去と未来に登場する「同様なもの」への関係づけを潜在的に含むことを示している。ファンタシアーのこのような機能は、一つの実在が、他の同様の実在との関係づけという「普遍化可能性」を孕んではじめてそれとして立ち現れるということを告げている。

論者は、それ以後の哲学が、アリストテレスとは異なり、ファンタシアーをそれ自体で独自の基本的認知形態であると考えることによって、實在の現われにも存在しないものの現われにも同じ「現われ」としての身分を与え、そのため「現われ」のうちで真正の知覚と錯覚や誤認識とを区別する根拠は何かという問題を惹起したことを指摘する。論者によれば、ファンタシアーをめぐるアリストテレスの外在主義的な思考は、そのような問題設定を拒否するものであった。

第4章は、現在では心的なものとの区別するための重要な指標である志向性という概念について、その直接の源泉であるブレンターノの「志向的内在」(intentionale Inexistenz)の概念とその背景となった彼のアリストテレス解釈を検討するという歴史的な視点から、この概念の含む問題を考察している。志向性は、心の自然化の可能性をめぐる議論の焦点の一つとなっている心的活動の特性であるが、この概念が理論的に定式化され明確な形で問題となったのはチザムによる分析以後である。しかしチザムの定式化も、志向性に、(i)実在しない事象との関係が成立する、(ii)実在する事象と関係の成立が当の事象の記述や理解の仕方に依存する、という二つの特質を付与していた。論者はこの二つの要素が、ブレンターノが志向的内在の概念に与えた、(i)対象の心的現象への内在性と(ii)心的作用の対象への指示性という二つの性格づけにすでに潜在していることを確認している。

ブレンターノにとって志向的内在概念の最も重要な源泉は、アリストテレスの認知理論における「素材を伴わない形相の受容」というアイデアである。論者はブレンターノのアリストテレス解釈の検討によって、志向的内在の概念が、現実存在とは異なる独特の内的な存在者を措定することではなく外在する事象に対する心的現象の独特の関係性を表現することであったことを論証している。しかし論者によれば、志向的内在の概念を支えるブレンターノの思考の重心は、実際にはアリストテレスの魂の概念を否定することを通じて確立されたデカルトの心の哲学に強く影響されており、またブレンターノのアリストテレス解釈は新プラトン主義をはじめとする解釈の伝統を継承するものであったが、その伝統はアリストテレスの基本的思考からはすでに逸脱していた。その意味で、ブレンターノは本来相反する二つの思考法を「志向的内在」という一つの概念に詰め込んだのである。

論者は他方で、志向性の語源となるようなラテン語 *intentio* の用法がアラビア語を媒介としてアリストテレスのノエーマ(思维内容)の翻訳語に由来するという事情を手がかりに、志向性を、ブレンターノとは異なるが、アリストテレスに即してとらえ直すことができると主張する。それは、心の志向性と言語の志向性が相互依存的であり心の志向性が公共的な言語の志向性を通じて成立するという見方である。論者は最後に、この見解は現在の分析的な議論では無視されがちであるが、志向性の本性についてさらに展開されるべき重要な洞察を含んでいることを展望している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、心という機構にかかわる基礎的な諸概念のいくつかを取り上げ、それらが淵源する古代ギリシアにおいてどのように成立し、その後の歴史的変遷の中で、どのように受容・変容されたかを綿密にたどり直すことを主たる作業とするものである。ただし、その歴史的探査は、それぞれの基礎概念をめぐる現在では支配的となっている考え方にかげられた理論的前提あるいはバイアスを剔出し、それらを当初の文脈と意味において捉え直すことで、心の問題を基本的に見直す意図をもったものである。

その序章に示されているように、論者によれば、以下に論じられる諸概念の変遷は、心を内なるもの・能動的に働くものとし、認識活動を外からの身体的感受(受動)に対する内からの能動的作用という、双方向的な交差によって成立するものとする基本的描像に規制されてきた結果である。それに対して、もう一つの理論的選択肢として、心の働きをむしろ外部世界の受容の過程において相関的な仕方では認める方向が、アリストテレスによって提示されていたことに論者は注目し、そこに生の原理としての豊かさや実効性を、心という機構に付与する可能性を見いだそうとする。本論文は、まず、その基本戦略において構想の大きさと独創的な視点を有するとともに、古代ギリシア・中世哲学を中心とした文献の博搜によって現代の問題状況を浮き彫りにする手法の斬新さにおいて、きわめて高く評価されるべきものである。

第1章では、「対象(objectum およびその近代諸語形)」概念の系譜を洗い直し、従来デカルトからカントに至る近代哲学の形成過程において object-subject の対概念の意味的転倒が生じたとされてきた通説に再考を促している。objectum がアリストテレスのギリシア語 *antikeimenon* (相関対象)に当てられた盛時中世哲学での用例、およびその前哨として同属

語 *objectus* (完了分詞) などの初期中世以来の用例を精査することによって、アリストテレス的な知覚と認識の構図が掘り崩されていく過程と「対象」の意味変遷を取り出し、それに逆照される仕方であリストテレスの魂論のメリットを明確にしていることは、きわめてすぐれた意義をもつ成果である。

古代ギリシアにおける感情概念の成立を論じた第2章、ギリシア的 *phantasia* と近代のファンタジーとの意味的対比を再検討した第3章は、それぞれに基本的な心的機構についての古代的内実を精密に捉え直した作業それ自体が、やはり高く評価されるとともに、心という問題を再考しようとする論者の立場と構想を具体的に窺わせるものとなっている。第2章ではプラトン、アリストテレスにおける感情論の形成において、すでに今日的なその生理学的自然性と文化・社会性との複合という視点が示唆深く読み取られるとする指摘、第3章では心の基本概念の変容に呼応してアリストテレスにおいて確保されていた、感覚プロセスを構成するファンタシアーの位置づけが変更され、外部世界と心との生動的な関わりを可能にする装置としての局面が失われたとする指摘は、斬新かつ有意義である。

第4章は、心の問題の鍵概念をなす「志向性」について、その直接的源泉である19世紀のブレンターノの「志向的内在」と彼が依拠したアリストテレスの魂論とを検討することを通じて、ここでも、両者の根本的なズレが心的活動についての基本的枠組の変更に帰着するものであることを明らかにしている。論者は、ブレンターノの「志向的内在」がアリストテレスの知覚・認識理論における「素材を伴わない形相の受容」に対する「解釈」として成立したものであることを指摘するとともに、その解釈はむしろ、デカルト的な二元論の浸透を受けつつ、新プラトン主義やイスラム・スコラ哲学のシエマに即したもので、非アリストテレス的なものであることを、適切に明らかにしている。のみならず、論者は、その文献博搜的な研究プロセスによって、「志向(性)」にあたるラテン語 *intentio* (およびそれに対応するアラビア語) が本来はアリストテレスの「思惟内容 (*noêma*)」の訳語であったことに着目して、ブレンターノとは内容を異にする仕方での、「アリストテレスの志向性」の構図を導き出している。論者の示唆する公共的な言語の志向性を通じて相互依存に成立すべき心の志向性という着眼は、アリストテレスのテキストに照らして首肯されるものであるとともに、当該問題に対するきわめて重要な洞察をもたらしている。

本論文は、もとよりここに論じられた事柄自体において十分に高い評価を与えられるべきものであるが、その構想の大きさのゆえもあって、むしろより先なる議論へと開かれた豊かな成果としてこそ、より大きな意義を認められるべきであろう。本論文では対抗軸の位置にあるアリストテレスの魂論については、別途に豊かな考究が進められつつあるし、またさらにその先においては、多面的な研究を統合した、論者による「心の哲学」の大成を期待する。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2005年2月21日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。